倭国から日本へ
「古代東アジア世界の中の日本」を高校生はどう描けるか

昭和学院高等学校　神山　知徳

１ 実施学年及び教科・領域、実施日

高校２年生文系　日本史Ｂ（４単位、高校３年との２年間にわたる分割履修）
２年Ａ組（ＴＡコース）７名　男子３名、女子４名。
①2022 年 11 月 28 日（月）４限、②同月 29 日（月）６限

２ 学習のねらいと博物館の活用との関連について

（１）単元名「平城京の時代」の中の「遣唐使」
→実際の授業は第２学期の最後（授業自体は平安時代の前に始める予定が、実施準備の遅れから、織豊政権の後で実施）

（２）ねらい
① 学習指導要領との関連
いわゆる「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の手段として、学習指導要領でも博物館や資料館、図書館などの公共施設を積極的に活用することが推奨されている。他方博物館側も展示方法に工夫を凝らし、より具体的に当時の姿をイメージしやすい空間にすべく、リニューアルオープンを果たしている。
博物館の展示を読み解き、そこから自分なりの歴史解釈・叙述を試みる行為は、日本史探究の中項目（３）の学習の特徴（主題を踏まえた考察と理解）で目的とされた「時代を通観する問いや仮説を踏まえ、資料を活用して、各時代の歴史の展開について、主題を設定し、事象の意味や意義、関係性などを考察し、歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期などを根拠を示して表現する学習を通じて、深い理解に至る学習」（『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説歴史編』203 ページ）の具体例として位置づけることが出来る。
このように学校教育における博物館利用が促される一方で、新型コロナ感染予防からの「新しい生活様式」が提唱されるようになり、来館前提で行う多人数での博学連携のあり方も見直されざるを得なくなっている。そこでＩＣＴ機器を活用しながら、教室内での授業から、将来的に個々人での博物館利用につながるような動機付けの道筋を付けてゆきたい。

② 単元の目標
607 年に遣隋使を派遣して以降、日本は隋・唐と対等の関係を築き、中国を大国とみなすことはなかったという理解が一般的である。それは『隋書』倭国伝にある遣隋使の国書の書き出しが、「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す」となっていることを根拠としている。「天子」から「天子」へという同じ称号を使うことから、日本は両者が対等であると主張したに違いないという。しかし果たして、そのような理解でよいのだろうか。
高校の教育現場で多くのシェアを誇る山川出版社の日本史教科書での当該記述をみると、その内容には、次のような変化が見られる。つまり、本文ではその立場について明確に説明しないも

の（『新編日本史』1967 年）から、「対等の立場を主張しようとする態度が認められる」（『詳説日本史（新版）』、1977 年）へ、そして「中国皇帝に臣属しない形式をとり」（『詳説日本史』2002 年）へというものである。

現行の教科書で見れば、管見の限りでは 5 社（山川出版社、実教出版、東京書籍、清水書院、明成社）、7 種の教科書（山川出版社、実教出版はともに 2 種刊行）の記述から、「対等の立場を主張しようとする」が 4 種、「臣属しない形式」が 2 種、特に両者の関係についてふれないのが 1 種という結果になった。ちなみに「臣属しない形式」を採用したのが、『詳説日本史改訂版』（山川出版、2018 年）と『日本史 B 新訂版』（実教出版、2018 年）である。この 2 つだけが「臣属しない形式」という曖昧な記述にとどめているのが印象に残る。他方従来の「対等の立場を主張しようとする」という記述がなされているのは、どちらかといえば、授業を進める上での分かりやすさを考慮した結果と言えようか。

そもそも「日出ずる処の天子」から「日没する処の天子」へという有名な国書の一節が、対等外交を求めたものではないという根拠は、「日没する」「日没する」が単に東西を意味する表現に過ぎず、さらにこの国書の記述が、舎利塔建立事業を命じた先帝（文帝）を尊崇し、仏教を介した友好的な交渉が展開した 7 世紀初頭の国際情勢を念頭に置いたものである（河上麻由子『古代日中関係史 - 倭の五王から遣唐使以降まで』中公新書、2019 年）ということである。つまりこの国書にいう「天子」とは、中華思想による天子ではなく、「重ねて仏法を興」した「菩薩天子」であり、対等外交を求めたものではないとする。

このように精緻に歴史叙述をしようとすればするほど、「朝貢外交から対等外交へ」という分かりやすい記述は避けられる傾向が強い。そのため、教科書では遣隋使以降の外交関係については明確な性格付けがなされない。それを反映してか、隋・唐時代の日中関係についての記述は、わずか 1 枚のパネル「東アジアのなかの列島日本」に止まる。そこでこの展示場が十分ではないことに気付き、自分だったらどのような展示物とキャプションを用意するかを考えさせたい。

以上を踏まえ、この単元での学習目標は次のようにしたい。

- 展示物の動画・写真をみて、その展示内容について理解できる。
- 展示や研究論文などの文献からその時代の特徴を掴み、時代像を描くことができる。最終的に 300 字～400 字の展示キャプションを作ることが出来る。
- タブレットなどで動画・写真を興味・関心を持ってみることができる。疑問や新たな気づきから、次の学習への動機付けが促されている。他の生徒と学び合い・教え合いができる。

（３）博物館との関連

①活用方法：非来館型活用

②活用資料

第 1 展示室「倭の登場」「倭の前方後円墳と東アジア」「古代国家と列島世界」

※使用 ICT 機器　電子黒板、Metamoji クラスルーム、iPad

（４）指導観

今回本実践を行うクラスは、高校２年生ＴＡ（トップグレード・アカデミー）コースの生徒 7 名で、難関国立大学を志望する生徒で構成されている。大学入試でも共通テストはもちろんのこと、二次試験でも受験科目として日本史Ｂを使用する生徒でもある。共通テストでは歴史用語の内容の知識・理解判断だけで解答できる問題は極端に少なくなり、思考・判断を問う問題が多く

出題されるようになった。特に 2022 年度の本試験においては、前年度よりも難易度が上がったことは、このような路線が既定路線になったことを示しているといえよう。その意味でも今後は、思考力・判断力・表現力を高める工夫が普段の授業から求められるということになる。そうした学力を高める場の一つとして、様々な展示資料を持つ博物館を利用する方法は有効であろう。

今回授業で教材とする歴博の展示（第１展示室「倭の登場」）においては、１・２世紀からいわゆる「倭の五王」と呼ばれる大王たちが宋に使者を派遣した５世紀までは、極めて具体的で詳細な東アジア世界の諸地域の対外関係が分かるようになっている。ところが遣隋使と遣唐使に代表される日本と中国を中心とする東アジア世界の叙述（第１展示室「古代国家と列島世界」）については、わずか１枚の展示パネルに止まっている。第１展示室リニューアルオープン以来、私は一来館者として展示を観たとき、そこに何かしら違和感を感じてきた。

今回授業を構想するにあたって、改めて古代東アジア世界の外交関係について教科書叙述を分析してみたところ、図らずも前述した展示叙述の状況と重なることに気づいた。ならば生徒の目線で歴博の展示で必ずしも十分ではないところを補うとしたら、どのような解説パネルを書くことができるか。中学校の歴史学習までで形づけられてきた「対等外交」像へのイメージに揺さぶりをかけることで、新たな歴史像、時代像を構築しようとする契機になるのではないか。必ずしも満足のゆくものにならないかもしれないが、歴博の豊かな展示資料を使って、生徒自らがどのような古代東アジア世界像を描けるのか、大いに楽しみにしたい。

３　指導計画（２時間扱い）

「倭国から日本へ」

１限目　歴博展示を見る

「漢委奴国王から倭の五王の時代へ　　国立歴史民俗博物館から学ぶ」

段階	時間	○学習内容　●学習活動	□指導上の留意点　■評価の観点
導入	5分	●歴博の紹介動画（一般向け映像）のうち，第１展示室の部分を視聴する。	□手許のタブレットで視聴する。 ■関心を持って歴博の紹介ビデオを見ることができる。〈関心・意欲・態度〉
展開	5分	●自作ビデオ「歴博第１展示室へようこそ」「紀元１～２世紀の東アジア」を解説を加えながら一斉に視聴する。 ○「倭の登場」	□動画以外に，写真もタブレット上でみられることを紹介する。 ■動画をみて，紀元前～２世紀の中国を中心とする東アジア外交，倭国の動向を知る。〈知識・技能〉
	5分	●自作ビデオ「アジアの王権」を解説を加えながら一斉に視聴する。 ○「倭の前方後円墳と東アジア」	□動画以外に，写真もタブレット上でみられることを紹介する。 ■動画をみて，３～５世紀の倭国と東アジアの外交を知る〈知識・技能〉
	8分	●自作ビデオ「古代国家と列島世界」を解説を加えながら一斉に視聴する。 ○「古代国家と列島世界」	□動画以外に，写真もタブレット上でみられることを紹介する。 ■動画をみて，７～８世紀の国家整備の過程を知る。最後に遣唐使を通じた外交のあり方がどう展示されているかを知る。〈知識・技能〉
	15分	発問1「倭の五王の時代までの東アジア外交について，展示をみてまとめなさい。」 ○「倭の五王の時代までの東アジア外交」 ●展示と写真を，手許のタブレットで確認しながらまとめる。	□手許のタブレットで，各自動画や写真をみてまとめる。 ■動画をみて，倭の五王の時代までの東アジア外交について，まとめる。〈思考・判断・表現〉
	7分	発問2「日本が遣唐使を通じて唐と交流を持ったとき，日中の関係はどうなっていたのだろうか，展示をみてまとめなさい。」 ○「遣唐使の時代の日中関係」 ●展示と写真を，手許のタブレットで確認しながらまとめる。	□手許のタブレットで，各自動画や写真をみてまとめる。 ■動画をみて，７～８世紀の東アジア外交について，どのように展示されているかまとめる。〈思考・判断・表現〉
まとめ	5分	●疑問点を明らかにする。 ○「遣唐使の時代の日中関係」	■遣唐使の時代の外交に関する展示が少ないことに気づく。〈思考・判断・表現〉

２限目　日本側・中国側の文献から、7～8 世紀の日本と唐の関係はどのようなものであったのか？

「7～8 世紀の日本と唐の関係はどのようなものであったか、歴博の展示に追加する新しい展示キャプション案を作成してみる」

段階	時間	○学習内容　●学習活動	□指導上の留意点　■評価の観点
導入	5分	●前時の振り返り（教え合い） ○「遣唐使の時代の日中関係は歴博の展示でどの ように描かれているか」 →「なかなか書きづらい」「唐からの最新の文化や技術を学んだ」など	□手許のタブレットで、前回の内容を振り返る。 ■前時の学習内容を、適切にまとめることができるか。〈思考・判断・表現〉
展開	10分	発問1「教科書記述で遣隋使についての記述にはどのような変化がみられるか。1967年、1977年、2002年、現在の教科書の記述を比較して、気づくことをまとめよう。」 ●遣隋使の記述の変化を教科書の記述から読み取る。 ○「遣隋使の派遣」	□手許のタブレットで、資料（遣隋使に関わる教科書記述の比較）を読む。 ■資料をみて、遣隋使の記述が「朝貢外交から対等外交へ」という記述が、「朝貢外交から臣属しない形式の外交へ」とトーンダウンしているにことを読み取り、表現する。〈知識・技能〉〈思考・判断・表現〉
	25分	発問2 「河上麻由子著『古代日中関係史-倭の五王から遣唐使以降まで』を読み、古代日中関係史を読み直し、次の事柄をまとめてみよう。」 ① 対隋交渉の真実～なぜ対等・冊封を求めなかったのか。（同書93～99ページ） ② 第一回遣唐使派遣と「争礼」問題～倭国は会見儀礼において唐の冊封を拒否したのか。（同書111～114ページ） ③ 白村江の戦いと倭国～倭国はなぜ唐の軍隊と対立してまで百済を救援したのか。（同書126～128ページ） ④ 唐からの接近、国号「日本」への変更の願い入れ。それは唐への対等、優越を主張するものだったのか。（同書128～148ページ）	□手許のタブレットで、資料（『古代日中関係史-倭の五王から遣唐使以降まで』の抄録）を読む。 ■資料をみて、遣隋使以降の記述が「対等外交へ」から「臣属しない形式の外交へ」とトーンダウンした根拠を、資料から読み取り、表現する。〈知識・技能〉〈思考・判断・表現〉
	7分	発問2 ⑤ 「7～8世紀の日中関係史～東アジアの中の古代日本」について、300～400字程度でまとめなさい。」 ○「遣唐使の時代の日中関係」 ●展示と写真を、手許のタブレットで確認しながらまとめる。	□日本が遣唐使を通じて唐と交流を持ったとき、日中の関係はどうなっていたのか、展示を参考に、展示で足りないところをまとめる。 ■資料をみて、7～8世紀の日中関係史を記述する。〈思考・判断・表現〉
まとめ	3分	●本時のまとめ	□定期考査で出題することを予告する。 ■出題の意図に沿う形で構成を考え、文章を整える。〈思考・判断・表現〉

４　実践の概要

１限目　**「漢委奴国王から倭の五王の時代へ　国立歴史民俗博物館から学ぶ」**

① 歴博の紹介動画「国立歴史民俗博物館紹介映像（一般向け映像）」のうち、第１展示室の部分を視聴する。　右の QR コードから→

②「倭の登場」（自作動画と写真）

③「倭の前方後円墳と東アジア」（自作動画と写真）

④「古代国家と列島世界」（自作動画と写真）

※②～④は、別刷り QR コードから。

<u>発問１「倭の五王の時代までの東アジア外交について、展示をみてまとめなさい。」（箇条書きも可）</u>

- ○　青銅器。七支刀→４世紀後半の倭王と百済王の友好関係の現れ。癸未年銘鏡→６世紀後半の倭王と百済王の友好関係の現れ。倭王と百済王の立場は対等。
- ○　中国に対して日本が下。奴国の王は中国に認められることで大国の王となった。当時の中国は、中国と関係の深かった奴国が鉄や青銅器の加工の高い技術を持っていたことから、とても発達していたことがわかり、シルクロードでイスラム圏とも交流があったことが窺える。
- ○　倭の王が中国に朝貢して中国から従国である証をもらって認めてもらった。冊封体制。
- ○　中国に朝貢（例えば生口。実際は朝鮮半島だけど）→冊封体制下にある。
- ○　中国の技術（例えば剣〈文字〉、金印、鉄器・須恵器の生産、機織り、金属工芸、土木技術、騎馬技術）→当時の中国の王から、日本の王の証を得ることで、日本国内の統治をしやくす‥（虎の威を借る狐）
- ○　統治制度を倣う（目的）
- ○　朝鮮半島の鉄資源を得る（目的）ため、伽耶国と密接な関係を持つ。
- ○　使者を派遣。冊封体制。
- ○　伽耶諸国と密接な関係を持っていたヤマト政権は、高句麗の南下政策に対し、百済と伽耶諸国とともに高句麗と戦った。百済や任那から様々な技術を学んだ渡来人が、馬術などの技術や文化を日本に伝えた。
- ○　４世紀の初めごろ、ヤマト政権は鉄資源を求めて朝鮮に進出し、高句麗と戦う。高句麗の好太王碑文に、戦った状況が書かれている。倭は海を渡って百済と新羅を従えた。百済が倭に遣いを使わして、同盟を結ぼうとしてきた。
- ○　５世紀になると、倭の五王が中国の南朝に朝貢し、称号を得ようとした。中国へ朝貢し、権威を借りていた。
- ○　倭の王が中国に朝貢して中国が銅鏡や鉄剣などを渡して倭の王だと認めた。

発問２「日本が遣唐使を通じて唐と交流を持ったとき、日中の関係はどうなっていたのだろうか、展示をみてまとめなさい。」

○　仲良くなった。

○　遣唐使を通じて、それまでの遣隋使以上に唐から最新の文化、先進技術を学ぶことにありました。

○　仲悪かった。

※積極的に答えた発問１に対して、発問２ではほぼ書けなくなっている。それはなぜか。わずかパネル１枚の展示物しかないから。

２限目　**「7～8 世紀の日本と唐の関係はどのようなものであったか、歴博の展示に追加する新しい展示キャプション案を作成してみる」**

発問１「教科書記述で隋使についての記述にはどのような変化がみられるか。1967 年、1977 年、2002 年、現在の教科書の記述を比較して、気づくことをまとめよう。」

○　1969 年　新しい知識をもたらした。1977 年　対等な立場の主張、留学生の派遣、2002 年煬帝に無礼とされた。新しい知識が伝わって政治に大きな影響を与えた。留学生の派遣。

○　1969 年　中国では 5 世紀以来の南北朝の対立を隋が統一し、めざましい国力の発展をみせた。ゆえに、太子は朝鮮半島への出兵を断念し、隋と国交を開いて積極的に大陸文化を取り入れることで、国力を増加する方向に転換した。607 年、小野妹子を遣隋使として派遣し、国交が開かれた。翌年の再度の派遣時には、留学生が随行し、彼らのもたらした新知識は、後の大化の改新事業を指導する役割を果たす。

○　1977 年　中国に隋の統一帝国が出現したことで、東アジアの情勢が大きく変化したのに伴い、新羅征討を中止して、隋と国交をひらく。607 年に小野妹子が遣隋使として派遣された。煬帝は翌年に。

○　1967 年では隋と国交を開いて大陸の文化を取り入れようとしていたことを理由に記述していて、1977 年では東アジアの情勢の変化に伴って、2002 年では王権に中央行政機関・地方組織の編成が進められたことによって遣隋使を派遣したと記述されている。

○　1967 年　隋と国交を開いて積極的に大陸文化を取り入れ、国力を充実させるため。1977 年小野妹子が行った翌年には、煬帝が日本に裴世清を使わし、日本も高向玄理などの留学生を使わした。2002 年　中国皇帝に臣属しない関係を取り、煬帝に無礼だとされた。

○　1967 年　新しい知識をもたらした。1977 年　対等な立場の主張。留学生の派遣。2002 年煬帝に無礼とされた。新しい知識が伝わって、政治に大きな影響を与えた。留学生の派遣。

※この時点では、散発的に「対等な外交」「臣属しない外交」の表現が出てくるが、残念ながら一人の生徒の書いた物の中で、朝貢外交との対比で書かれることがなかった。第１学期の定期考査で、遣隋使以降対中国の外交の変化について記述させたが、その時の経験があまり活かされていないように感じた。

発問２　「河上麻由子著『古代日中関係史 - 倭の五王から遣唐使以降まで』を読み、古代日中関係史を読み直し、次の事柄をまとめてみよう。」

①対隋交渉の真実～なぜ対等・冊封を求めなかったのか。（同書 93～99 ページ）

- 隋が朝鮮半島の国々に冊封を執行しなくなった。
- 倭国にとって隋は台頭を求めるような相手ではなく、武力や経済力、政治力などあらゆる面において格上の国であった。倭の五王の時代には冊封による権利の補償が必要であったが、遣隋使の時代では国内支配が主流となり、倭国の王権が確立されるようになったため、権利を守ってもらう必要がなくなったから。
- 日本の天皇の権威をとても強くするために、天皇よりも上の立場の者を作りたくなかったから。
- 支配を安定させる手段として冊封は必ずしも不可欠ではく、隋は東アジアへの冊封に熱心ではなくなっていくようである。冊封は既に不要の時代だった。
- 倭国が隋に対して対等外交を求めなかった理由は、倭国が政治的、軍事や文化活動を支える経済力、仏教をはじめとする文化の面でも、隋の圧倒的優位性を認めていたからである。隋が日本に対して冊封を求めなかったのは、既に東アジアへの冊封を行っていない状況で、倭国に対しても冊封を求める必要がなかったからであり、倭国は中国皇帝の権威を背景に豪族への優位性を維持する必要がなくなっており、互いに冊封関係を必要としていなかったためである。

②第一回遣唐使派遣と「争礼」問題～倭国は会見儀礼において唐の冊封を拒否したのか。（同書 111～114 ページ）

- 争礼とは、唐の使者と諸国王との間における儀礼上の争いで、上下を争うものであるが、そもそもこの問いでは、唐が日本を冊封せねばならなかったという前提を必要とするが、それが成り立たないので問い自体が誤りである。

③白村江の戦いと倭国～倭国はなぜ唐の軍隊と対立してまで百済を救援したのか。（同書 126～128 ページ）

- 倭国には、新羅と戦う意識はあっても唐との直接対決という状況が念頭になかった。もしくは、高句麗の先例から軍事的に唐と対立しても、有利な条件で戦闘を終え、その後に唐に謝罪すれば許しを得ることができると考えたからだと推測される。
- 百済が仏教など様々なものを倭にもたらしたから。
- 倭国は新羅、高句麗、百済の三国が平等であるという唐の方針に賛同していたが、唐自らその均衡を崩壊させたことに強い反感を覚え、唐が支援していた新羅と対立する倭国と仲のよい百済を支援し、抗議するため。

④唐からの接近、国号「日本」への変更の願い入れ。それは唐への対等、優越を主張するものだったのか。（同書 128～148 ページ）

- 本来の朝貢は毎年行われるのが望ましいが、日本の遣唐使が「およそ 20 年に１度の朝貢」であるのは珍しく、遣唐使は外交権を掌握する天皇の１代１度の事業であったと認められる。遣唐使の任命が天皇の即位時、又は皇位継承者が決定した時点であることが多いのも注目に値する。ところが「日本」という国号は『百済禰軍（でいぐん）の墓誌』で百済を「日本」と表しているように中国からみた極東を指す一般的な表現で、当時の中国の一般常識を反映している。つ

まり、「日本」という国号は、唐（周）を中心とする国際秩序に、極東から参加する一国という立場を示すものであった。また、「日本」は国号の変更を申し出ており、承認を受けている。朝貢国であるからには国号を勝手に変更することは出来ないため、皇帝の裁可を仰いだとすると、「日本」という国号は、やはり唐への優位性を主張するものではなかったと言える。

※④の設問は要求水準がかなり高く、７名中わずか１名しか解答しなかった。

⑤「７～８世紀の日中関係史～東アジアの中の古代日本」について、300～400 字程度でまとめなさい。

評価基準
①　読みたいと思わせるタイトルの工夫がある。
②　倭の五王の時代の外交を念頭においた記述を心がけている。
③　「朝貢体制から対等外交へ」などのような単純な歴史叙述に陥らず、より豊かな古代の東アジア外交像を描いている。
④　事実誤認、誤字・脱字等については、適宜減点する。

○　**「教科書だけじゃ分からない！ ７～８世紀の日中関係～これであなたも歴史マスター（笑）」**
一般的に７世紀～８世紀の日本は中国と対等な外交をしたと言われているが、対等な関係だったと断言するのはできない。少なくとも、倭は隋の冊封体制下にはなかった。それは両国共に必要としていなかったからである。倭は政治、軍事や文化活動を支える経済力、仏教をはじめとする文化面で隋の圧倒的優位性を認めていた。その反面、五王の時代以降、中国皇帝の権威を背景に豪族への優位性を維持する必要がなくなっていた。一方の隋は、既に東アジア諸国も冊封をしていなかった。唐との関係において「日本」への国号変更は白村江の戦い後、日中関係の修復を図る新生倭国を示す目的があった。「日本」は中国からみた極東を指す一般的な表現で、唐の常識を反映したものだった。つまり、倭は日本に国号を変えることで、極東から中国の経済圏に参加する一国であるという地位を示したのである。（360 字）

○　**「東アジア最強の中国と弱小日本の関係」**　遣唐使も倭の五王と同じく朝貢形式だったが、遣隋使では冊封を要求していなかった。それ以前隋は周辺国と冊封していたが、600 年頃から冊封に熱心ではなくなり、周辺国を冊封したという記録は残っていない。そして唐・新羅と倭との間で白村江の戦いが起こる。しかしその後も遣唐使は派遣されがが、唐が冊封を求めるということはなかった。また天武天皇の時代となって国号を日本と変えた。朝貢国は中国に対して国号を変えたという報告をしなければならず、日本は使者を派遣した。このことから日本は中国と朝貢関係にあったといえるが、日本は対等を主張している。そして武則天からの冊封の求めを拒否し、周りの朝貢国とは異なり、約 20 年に一度の遣唐使への派遣をすることとなった。（316 字）

○　**「日本 with 中国～中国発展しすぎ!?」**　７世紀の日本と中国の関係は、その当時の中国である隋は、東アジアへの冊封に熱心ではなくなっていた。そのような中、当時の日本である倭国は、遣隋使を隋へ送り、倭国が隋に対し、隋が優位であることは認めたが、冊封は受けず、倭国と隋が対等な関係になることを求めた。これは倭国が隋の軍事や経済、政治的に大

きく劣っていることを痛感し、国内制度の整備を急いだことから、天皇よりも上の立場である人をつくらないようにするためである。そして８世紀では倭国が、当時の中国である唐に遣唐使を送り、国号を「日本」に変更する願いを表明し、許可されていることから、中国は７世紀ごろから東アジアの冊封にあまり興味がなく、そのような中国の態度のおかげで、日本は中国と対等な関係を築くことができていた。（332 文字）

○　**「対等から敵対へ」**　隋への国書は、中国皇帝に対して臣属しない形式をとり、冊封を要求していない。皇帝の権威の背景によって、豪族を維持しようとした倭の五王の時代とは異なっていた。対等を要求したことが、煬帝の怒りを買ったが、この時すでに、朝鮮半島に対して冊封を行っていなかった。また、倭国の天皇中心を目指した制度は、冊封による支配の安定がいらないほどに強化されていた。しかし、その後朝鮮半島への領土拡大をしたい中国は、倭との戦争を避け、裴世清を倭に遣わしたので、冊封が不可欠となった。第一回遣唐使は 630 年。太宗に歓迎され、高表仁とともに帰国したが、倭国王と高表仁と上下を争う「争礼」を起こしてしまった。その後の白村江の戦いでは、長年強い信頼関係を築き上げていた百済を滅ぼした唐に強い反感を覚え、百済に援軍をした。（346 字）
※条件は「７～８世紀の日中関係」であるが、８世紀についてまったく記述がない。

※　破線部＿＿＿は要検討の箇所。最後のレポートを仕上げるのは相当にハードルが高かったようで、何とか字数制限を守って最後まで書き上げたのは、７名中４名にとどまった。

５　成果と課題

歴博の第一展示室「倭の登場」「倭の前方後円墳と東アジア」「古代国家と列島世界」の内容を理解するために、自作の動画と写真を用意し、それをクラウドに上げ、まずは教室前面のスクリーンに映し、若干のコメントをつけて解説した。次に生徒のペースで、限定公開にした自作動画と写真を手許のタブレットを使い閲覧させ、課題に向き合わせた。これはＩＣＴ教育環境が整った今だからこそ、可能なことなのであろう。

１限目の発問１**「倭の五王の時代までの東アジア外交について、展示をみてまとめなさい。」**では、豊富な展示から様々な情報を読み取り、表現することが出来た。その一方発問２**「日本が遣唐使を通じて唐と交流を持ったとき、日中の関係はどうなっていたのだろうか、展示をみてまとめなさい。」**になると、途端に情報が乏しくなってしまった。７世紀～８世紀の展示を、紀元前～５世紀の展示と比較すると、特に日中関係史に関わる情報については圧倒的に量が少ない。７世紀～８世紀の展示が「古代国家と列島世界」であるが、そこでは倭国が「日本」へ、大王が「天皇」となり、律令国家が整えられていく経過をつぶさに見ることができる。ここでは唐との国交は、わずか１枚の解説パネルにまとめられ、文化交流だけがその成果として挙げられているにすぎない。それを１限目までにどこまで意識できていたかといえば、心許ない。それにクローズアップするための発問が、上述の発問２であった。

２限目は、前時の振り返りを行い、歴博展示のある意味空白になっているところ（７～８世紀の東アジア世界の中の位置づけ）を意識させるため、教科書では遣隋使の記述がどう変化してきたかを読み取らせた。ただそれがどの程度明確に自覚できていたかどうかとなると、やや心許ない。

次に、なぜ「対等外交」ではなく「臣属しない形式の外交」という位置づけのあまり明確でな

い表現に変わったのかを、河上麻由子氏の著書『古代日中関係史』の抄録を読むことで、その背景を理解し、歴博展示に欠けている「７～８世紀の東アジア外交」観を補おうとした。ここでは博物館展示そのものではなく、専門的な新書の読み取りが主な学習活動となった。同書は一般向けの新書といいながらも、実際にはかなり読み応えのある専門性の高い文献であり、高校２年生がどこまでこれを読み込み、まとめることができるのかという迷いもあった。これはなかなかに困難を伴う作業であった。それでも７名の生徒が複数の資料を深く読み込む作業を行い、拙いながらも何とか課題に答えようと取り組んだ結果、それなりの形になった。ただ最後まで到達できたのは、７名中わずか４名であった。この結果が十分ではないことは痛感しているが、その原因はどこにあるのか、どこをどう改善すれば、より多くの生徒がゴールに到達できるのか。それを解決する道筋が見えたところで初めて、この実践が汎用性を持ちうるものになると信じている。

最後に、授業に参加してくれた生徒の感想を紹介したい。「この時代に日本は中国と対等な関係ではなかったとするならば、どの様な関係だったのか自分なりの答えを出せてよかったです。自分で答えを探していて思ったのは、「教科書の様に曖昧な表現をするしかないな」です。ただ、漠然と教科書の曖昧な表記を受け入れるよりも自分で考えた結果曖昧な表現しか思いつかなかった、と気付けた方が日本史を学んでいることへの満足度が違うなと思いました。やっぱり文字の羅列としての歴史よりも、今よりずっと前の人々が「生き抜いてきた」ことの歴史の方が面白いし、楽しいと感じました。」（傍線部、引用者）この生徒がいくつかの資料を深く読み込み、整合性がとれるように理解し、歴史叙述に苦労しみながら書き上げた深い達成感を、ここに感じ取ることができる。なかなかに難しい取り組みではあったが、こうした感想を持つ生徒が一人でも多く生まれるような授業実践の開発を今後も続けていきたい。

〔参考文献〕

- 河上麻由子『古代日中関係史-倭の五王から遣唐使以降まで』中公新書、2019 年
- 黛弘道編『古文書の語る日本史１　飛鳥・奈良編』筑摩書房、1990 年
- 国立歴史民俗博物館『平成 22 年度人間文化研究機構連携展示　アジアの境界を越えて』2010 年
- 国立歴史民俗博物館編『わくわく！探検　れきはく　日本の歴史　１先史・古代』吉川弘文館、2019 年

以上